長崎の午年にちなむもの

本会理事　下妻みどり

新年明けましておめでとうございます。

丙午のいわれ

２０２６年、令和８年となる今年は、十干十二支では「丙午（ひのえうま）」の年です。江戸時代には「火事が多い」と言われたり、付け火をした八百屋お七がこの年生まれとされたことから、「丙午の女性は気性が荒い」などという迷信もありました。「丙」は、万物が「木・火・土・金・水」からなるとする「五行」においては「火の兄（え）」、「午」は十二支を方角に振り分けると南、五行ではこれまた「火」の盛りですから、そのようなことから「火がついた」のかもしれません。

午年のできごと

長崎の歴史の中で「午年」を探してみると、まずは大村純忠とイエズス会の間で長崎開港の協定が結ばれたのが、元亀元年（１５７０）でした。１２年後の天正１０年（１５８２）には、その港から天正遣欧少年使節が出航します。長崎と西洋との出会いにおいて、どちらも重要な年となりました。

長崎と中国の交流に大きく貢献した隠元禅師が渡来したのは、承応３年（１６５４）。興福寺を足がかりに、黄檗宗の教えからインゲン豆まで、さまざまな文化、文物を伝えました。元禄１５年（１７０２）には、現在は中華街となっている新地蔵所が設置され、唐船貿易の荷物が収められます。

寛政１０年（１７９８）は、出島受難の年でした。カピタン部屋を含む多くの建物が火事になり、商館長のヘンメイ（ヘンミー）が江戸参府の帰りに死亡。さらには蘭船エライザ号（実際は雇われたアメリカ船）が長崎港外で沈没します。６０年後の安政５年（１８５８）には、出島のオランダ商館は廃止されて領事館となりました。この年には英語伝習所も設置され、長崎は新しい時代へと移り変わっていきます。後に出島の南側は埋め立てが進み、日露戦争の際に軍馬が集められたことから「千馬町」と呼ばれる町も造成されました。

馬上の殿様

「馬」にゆかりのある人として思い浮かぶのは、永見徳太郎です。貿易や金融、倉庫業などで栄える永見家の六代目として生まれ、ブラジル国の名誉領事まで務めました。そんな「銅座の殿様」は、マイカーならぬ自分の馬を持ち、長崎の町を闊歩する姿も有名だったようです。大正１１年（１９２２）に長崎を訪れた芥川龍之介は、永見が旅館に訪ねてきた時のことを「早朝往来より声をかくるものあり。二階の障子をあけて見れば、馬に乗れる永見夏汀、馬丁と共に佇みゐつ。午飯を食ひに来ませんかと云ふ。」（「長崎日録」）として、永見が前の日にも来ようとしたのに、馬が言うことを聞かなかったことも記しています。実業のほか、芸術にも秀でた永見でしたが、乗馬の腕前はさほどではなかったのでしょうか。

午年生まれの人々

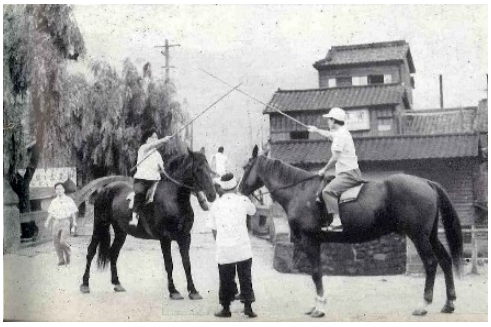
出島出入絵師の川原慶賀の生年は、万延元年（１８６０）に描いた「永島キク刀自像」に「七十五歳種美写」（種美は慶賀の別名）とあることから、天明６年（１７８６）と推定されています。寛政１０年（１７９８）に生まれ、代々続く町年寄を務めた高島秋帆は、砲術家としても重要な役割を果たしました。

幼時から長崎に暮らし、新聞記者から作家となった平山蘆江は明治１５年（１８８２）生まれ。長崎を題材にした作品には『唐人船』『長崎出島』などがあります。

長崎医学専門学校（現長崎大学医学部）の教授として赴任、芥川龍之介や菊池寛ら、長崎を訪れた文化人とも交流した歌人斎藤茂吉も同年の生まれです。長崎の風景や歴史を版画で描いた田川憲は、明治３９年（１９０６）年生まれですので、今年生誕１２０年を迎えます。

学徒動員先の三菱兵器大橋工場で被爆した際の体験を『祭りの場』に著した芥川賞作家・林京子は、昭和５年（１９３０）生まれ。ノーベル文学賞作家のカズオ・イシグロは昭和２９年（１９５４）から５歳になるまで長崎で育ちました。長崎ゆかりの人々に限ってみれば、午年生まれには、文化芸術に長けた人物が目を引きます。

懐かしい風景



『長崎手帖』２５号（写真　真木　満）

現在、長崎の町で馬を見る機会といえば、長崎くんちのお下り、お上りや流鏑馬神事でしょうか。昭和３５年（１９６０）のくんちでは、前回に引き続き東浜町の本踊に２頭の馬が登場しました。同年発行の『長崎手帖』には、稽古の様子が紹介されています。「東浜町の本踊『虞美人草』の稽古は早朝六時半。風頭山もまだ靄の中。場所は柳青める眼鏡橋のほとり。馬上の姿は劉邦、関羽に扮する浜の町のお嬢さんで、両雄槍（ここでは竹槍）をもっての決斗の場の素顔である。」今となっては珍しい風景です。

懐かしく思い出すのは、ずんぐりとした対州馬の姿。建築資材などの重い荷物を背負っては、一歩一歩、急な坂や階段を上っていました。１０００万ドルと称された長崎の夜景の輝きは、馬たちの足取りにも支えられていたのですね。

力強く駆ける馬のごとく、本年が良い年になりますように。

参考文献

田栗奎作編『長崎手帖』２５号　１９６０年